

大学生における情動知能とスポーツとの関係性について

長縄貴之（ 静岡大学 ）

1. 目的

本研究の目的は、スポーツの種類や競技歴によって情動知能にどんな違いや差があるのかを研究し、情動知能とスポーツとの関係性について検討することである。

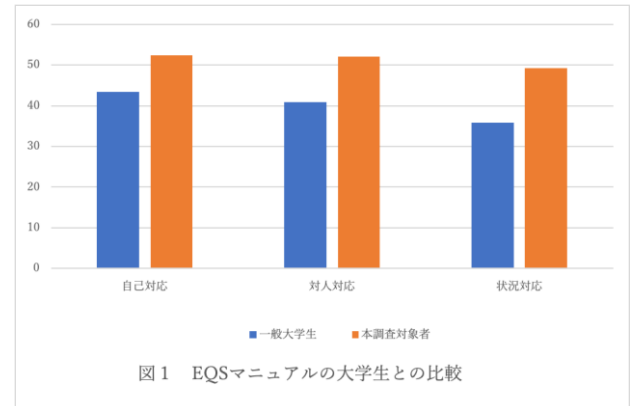
2. 研究方法

- 1) 対象者はS大学の体育会系部活動に所属する学生 311 名(平均年齢 20.0 歳、男性 230 名、女性 81 名)であった。
- 2) 調査用紙は、フェイスシート(性別、年齢、学年、所属する部活動、競技歴)、情動知能尺度(EQS)の2つをまとめ、1枚の質問紙とした。
- 3) 調査方法は2つの方法で行い、調査者自身が部活動の時間に赴き、実施・回収を行う方法と、事前に説明を行い、同意を得た上で研究協力者に質問紙を渡し、実施・回収を依頼する方法であった。
- 4) 分析方法は以下の5つで行う。

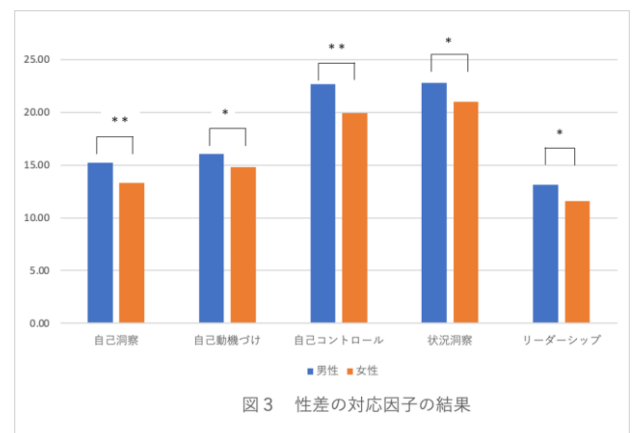
- ・EQS マニュアルの大学生のデータと比較
- ・単一種目経験者と複数種目経験者の2群に分けt検定
- ・個人種目、対人種目、団体種目の3群で一元配置分散分析
- ・性差の2群でt検定
- ・学習指導要領の種目による一元配置分散分析

3. 結果と考察

- 1) 本調査対象者の情動知能は全ての領域において上回っていた。このことから、情動知能に対するスポーツ活動のポジティブな影響が伺えた。
- 2) 単一種目経験者と複数種目経験者の情動知能に有意差はなく、違いは確認されなかった。



- 3) 個人種目、団体種目は対人種目に比べ、「自己コントロール」が有意に高く、自分で目標を決めたり調整する技量が高いと考えられた。
- 4) 男性は女性に比べ、「自己洞察」、「自己動機づけ」、「自己コントロール」、「状況洞察」、「リーダーシップ」の5つの対応因子、「自己対応」、「状況対応」の2つの領域において、有意に高い結果となった。



- 5) ゴール型、ベースボール型、ネット型、陸上、水泳、武道には有意差は確認されなかった。

4. 主な文献

- 1) 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子(2001) EQSマニュアル.実務教育出版:東京